

# 昭和恐慌期の高島亀太郎(上)

——高島製糸について——

川 東 蟬 弘

## 目 次

はじめに

第1章 昭和5・6年

第2章 昭和7年

第3章 昭和8・9年

## は じ め に

大正4年(1915)6月、製糸業を開始した高島亀太郎は、第1次大戦後の恐慌、不況期においても着実に規模拡大、技術革新を行い、経営を拡大させていました。昭和に入り、3年(1928)には、新たな設備投資を行い、新工場を建設し、新しい機械を導入し(YD式繰糸鍋110釜購入、半沈繰法の採用、千葉式煮繭器の購入)、また、翌4年には自動索緒機(松井式)も購入し、生産性の向上に努めていました。さらに4年から繭の特約取引を始め、良質の繭の確保にも努めていました。

今回は昭和初期(昭和2～4年)の高島製糸場の状況について見ましたので<sup>1)</sup>、今回は、昭和恐慌期(昭和5～9年)の高島製糸場について見ていくことにします。

昭和4年(1929)10月、アメリカに端を発した大恐慌が、翌5年には日本に

---

1) 拙稿「昭和初期の高島亀太郎(上)―高島製糸について―」(『松山大学論集』第10巻第4号、1998年10月)。

も波及し、日本は深刻な恐慌状態に陥りました。また、時の浜口雄幸民政党内閣の金解禁政策（昭和5年1月11日施行）が恐慌に拍車をかけました。いわゆる昭和恐慌の爆発です。恐慌により株式価格、商品価格が大暴落し、中でも生糸と繭の暴落は深刻でした。横浜市場での生糸の価格（100斤〔16貫〕当たり、清算価格、先限、平均価格）は、昭和4年に1,190円でしたが、5年に667円へ、6年に619円、7年に757円へと、恐慌直下にはほぼ半値に暴落しています。繭の暴落はもっと激しく、繭価（全国平均上繭1貫当たり、春蚕）は、昭和4年には7円57銭でしたが、5年に4円、6年に3円08銭、7年に2円54銭へと、3分の1に大暴落しています<sup>2)</sup>

昭和恐慌による深刻な糸価暴落の結果、愛媛県の製糸工場は次々に倒れています。器械製糸場数は、昭和4年189、5年193、6年205でしたが、7年には175、8年には151、9年には145、10年には121へと激減です。製糸工場は、中小規模の製糸工場のみならず、100釜以上の比較的大きな製糸工場も激減し、昭和4年に28、5年29、6年32でしたが、7年には24、8年には19、9年には18、10年には15へと半減しています。愛媛の製糸業の代表的な存在である摂津静雄経営の摂津製糸も昭和7年に破綻しました<sup>3)</sup>

以下、昭和恐慌期の高島製糸場の動向について、「亀太郎日記」を参考にしながら見ていきましょう。

## 第1章 昭和5・6年

昭和恐慌直下の昭和5・6年の「亀太郎日記」は、残念ながら散逸のため無く、恐慌期の高島製糸場の具体的状況は不明です。そこで、他の資料を参考にしながら、高島製糸の状況を見てみましょう。

商工省調査の「工場調査票」によりますと、昭和5年12月末時点での高島製糸場の設備は、繰糸器械104釜、揚返窓数100、乾燥機1、煮繭機1、電動機1、

2) 大日本蚕糸会『蚕糸年鑑』昭和8年版、63、184頁。

3) 拙稿「昭和期愛媛の農業構造(2)」(『松山大学論集』第7巻第2号、1995年6月)。

蒸気機関1であり、職工数は、男工11名、女工116名、合計127名、事務員1名、技術員1名であり、作業日数は312日、1日の労働時間は、1月～6月が1日12時間、7月～12月が1日11時間、賃金は、男工1日80銭、女工65銭、となっていました<sup>4)</sup>。なお、繭使用高や生糸生産高は不掲載で不明です。高島製糸の設備は、恐慌直前の昭和3年が110釜でしたので、5年には6釜ほどの減釜ですが、他は大きな変化はないようで、5年度もほぼ前年と同じような設備で経営されていたようです。

さらにまた、農林省蚕糸局の昭和5年度の製糸工場調査『第十二次全国製糸工場調査』によりますと、6年5月末時点での高島製糸場の設備は、釜数104釜、緒数520、揚返窓数100であり、職工数は、男工12名、女工126名、合計138名、作業監督2名、技術員1名であり、作業日数は270日、使用繭は3万8,000貫、生糸生産高は4,320貫(全部輸出)、屑物890貫、1釜当たり生糸生産高4.6梱、目的織度糸各14中、となっていました<sup>5)</sup>。さきの商工省「工場調査票」とは調査日が違いますので、職工数に若干数字に違いがありますが、設備状況については変わらず、昭和5年度は104釜で操業していました。

さて、昭和5年に入り、先に指摘したように、生糸価格が大暴落し、製糸業は深刻な打撃を受けましたが、この深刻な恐慌期においても、高島製糸は何とか持ちこたえたようです。昭和6年12月末時点の商工省調査の「工場調査票」によりますと、高島製糸場は、繰糸器械112釜、再繰器械100(うち30は休止)、千葉式煮繭機1、今村式乾燥機1、蒸気機関2(うち1台は休止)、電動機2であり、職工数は、男工8名、女工128名、合計136名、事務職員2名、技術員1名であり、作業日数は327日、1日の労働時間11時間、賃金は、男工1日80銭、女工1日48銭、賃金支払い総額は2万6,450円、繭使用量は4万6,475貫、

4) 「工場調査規則」(昭和4年11月、商工省令第17号)及び「資源調査法」(昭和4年4月法律第53号)に基づき高島製糸場が提出した「工場調査票」(昭和5年1月～12月末までの1年間、昭和5年12月末現在。6年2月18日提出)。高島文庫所蔵。

5) 農林省蚕糸局『第十二次全国製糸工場調査』(昭和5年6月～6年5月の期間に営業した10釜以上の製糸工場調査、6年5月末現在)。

15万5,405円、生糸生産高は3万4,000斤(5,440貫)、生糸生産額は19万7,200円、在庫量は1,000斤(160貫)、6,800円、生皮苧435貫、3,045円、生皮苧在庫15貫、120円、等々となっていました<sup>6)</sup>

すなわち、高島製糸場は、5年末に比べ、6年末には、女工の賃金を大幅に切り下げ(5年の65銭から6年には48銭に、26%引き下げ)、他方、繰糸釜数と女工数を若干増やし、作業日数も増やして生産高を増大させ、さらに、緒数を5条から6条に増やし(緒数は672)、恐慌を切り抜けているようです。

そして、亀太郎は、恐慌直下の昭和6年度(昭和6年6月～7年5月)の高島製糸場の状況を振り返り、7年6月に、次のように述べています。「本日ヲ以テ古繭繰糸ヲ全部終了。三月以来糸価崩落、斯界、窮迫名状スベカラザルモノアルニ不拘、昨年六月以来一ヶ年ヲ通ジ、昭和六年度ノ製糸トシテハ損失ヲ見ザリシノミナラズ、乾燥機ノ改造、六条鍋ニ取替等必要ノ設備ヲ改善シテ、尚些少ナガラ利益ヲ挙げ得タルハ望外ノ幸ニシテ、天寵ヲ謝スルノ外ナシ」(6月16日)。

このように、深刻な恐慌・生糸価格暴落にもかかわらず、高島製糸場の場合は、赤字にならず、僅かですが黒字で、経営を持ちこたえたのでした。その要因は、①前述の女工賃金の切り下げと労働強化、②若干の技術革新(5条繰から6条繰への改善)、ならびに③安い原料繭の確保であったようです。

以下、7年以降(製糸年度としては、5月までは6年度)は、「亀太郎日記」が残っていますので、日記を参考にしながら、昭和恐慌期の高島製糸場の動向について見ていきましょう。

## 第2章 昭和7年

前年の昭和6年(1931)12月11日、若槻礼次郎民政党内閣が閣内不統一(安達謙蔵内相の民政・政友協力論)から総辞職し、12月13日、犬養毅政友会内閣

6) 商工省調査「工場調査票」、昭和6年12月末現在。7年2月5日提出。高島文庫所蔵。

(蔵相高橋是清)が成立し、経済政策の転換が行われます。犬養内閣は、前内閣が行った金解禁政策を止め、金輸出再禁止を決定しました(12月13日)。この金輸出再禁止により、株式価格、商品価格が一斉に高騰に転じ、また、為替相場は円安に転じました。これにより、景気が一時期好転しました(「再禁止人気」)。しかし、この株価・物価の高騰・「再禁止人気」は、短期間で、翌7年の2月には頭打ちとなり、3月以降、再び暴落に転じ、恐慌状態に陥りました。さらに、5月15日には海軍の一部将校により犬養首相が暗殺され、またまた市場価格が暴落し、6月に景気はどん底・最悪の状態に達しました。

その後、犬養暗殺の後を受け、斎藤実「挙国一致」内閣が成立し(昭和7年5月26日、大蔵大臣は引き続き高橋是清)、その景気対策(6月、8月に臨時議會を招集し、財政金融面から景気回復策を講じ、日銀金利を引き下げ、時局匡救予算を編成し、日銀引受による国債発行等を行う)や為替暴落による輸出回復等により、7月以降漸く市場が回復し、12月まで株式価格、商品価格が高騰し、金再禁止後における初めての本格的景気を迎えています<sup>7)</sup>

それを生糸価格の動向で見ますと、横浜市場の生糸価格(100斤当たり、清算価格、先限、月平均)は、昭和6年12月に622円でしたが、7年1月に686円、2月に682円と高騰したものの、3月以降また暴落し、3月653円、4月583円、5月513円へと落ち込み、6月には478円と最悪の値をつけました。その後、7月に518円へ回復し、以後年末まで高騰していています(12月に944円、6月の約2倍)。要するに、7年の前半の糸価は恐慌状態、後半に回復・高騰です<sup>8)</sup>

さて、昭和7年の亀太郎日記を見てみましょう。高島製糸場は、1月2日より操業を開始しています(釜数112釜、1釜の緒数6で総緒数672)。高島製糸場は優良糸の製糸場でした。この日、亀太郎は、国立検査生糸所(横浜、明治29年設立)に高島製糸の生糸を送り検査をしてもらっています。「工場ハ本日ヨ

7) 高橋亀吉『大正昭和財界変動史(下)』1396～1407頁、1635～1639頁。

8) 同『前掲書』1398頁。

り繰業ス。生糸拾個（洋俵）ヲ出荷スル等業用ヲナシタリ。本年ヨリ国立生糸検査所ノ格付検査実施セラレ、其第一回荷物ナリ」（1月2日）。生糸の検査は、①再繰検査、②平均織度検査、③糸条斑検査、④織度偏差検査、⑤類節検査の5項目によって検査され、再繰と平均織度検査は実際の成績で表し、糸条斑検査、織度偏差検査、類節検査の3項目は、その良否が100点法の点数で表されます<sup>9)</sup>。高島製糸の生糸格付の結果は1月13日に知らされました。「吾工場最初ノ第三者検査受検品ハ八十六点A A格七〇〇円値入ノ入電アリ」（1月13日）。このように、高島製糸の糸は、品質優秀でした。

亀太郎は、恐慌による糸価暴落に対し、生産性向上・コスト切り下げで乗り切るべく、2月に半田式多条繰糸機2台を購入、据えつけし、技術革新で対応しています。宇和島では最初の多条繰糸機の導入でした。「予テ器械荷物到着シ居タル半田式多條繰二台取付ノ為メ、職工来着。直チニ据付ニ着手ス。場所ハ煮繭場隣接ノ一室ナリ」（2月27日）、「半田製糸研究所神戸出張所技術員福富三男氏来場、据付工事ヲ督シ、吾家ニ宿泊ス」（2月28日）、「今日正午迄ニ半田式多條繰製糸機二台ノ据付ヲ了リテ、職工ハ俵津ヘ向ケ出発シ、午後ヨリ二人ノ工女ヲ選ミテ、福富氏指導ノ下ニ多條繰ノ繰糸ヲ開始ス。宇和島市ニ於ケル多條繰ノ嚆矢ナリ」（2月29日）、「半田式多条繰ノ練習其緒ニ就キ、二十口ヲ繰リ得ルニ至リタレバ、尚引続キ試験繰糸ヲ行フコト、シテ、福富氏出発ス」（3月4日）。

また、亀太郎は、恐慌対策として、繭の特約取引の養蚕組合をさらに拡大し、3月19日には上畑地養蚕組合との特約取引を決定しています。「午前十一時ノ宇和島自動車ニテ出発、上畑地赤松貞氏方ヘ赴キ、同氏ト会談ノ上、予テノ打合ニヨリ上畑地養蚕組合員ヲ集メテ特約組合設置ニ関スル講演ヲ催ス。午後三時ヨリ同地禅蔵寺ニテ開会、当场ヨリ西山君、豊予館ヨリ片山館主、松川主任モ来会シ、予、主トシテ講話ノ結果、今春ヨリ特約取引ヲナスコトニ決定ス」

9) 細川幸重『生糸及乾繭 取引所論』142頁。

(3月19日)。

そして、養蚕組合を技術指導するために、4月下旬、養蚕教師を各養蚕組合に派遣しています。「本日吾工場特約養蚕組合派遣ノ養蚕教師指導事務打合会ヲ午前拾時ヨリ開キ、予テノ通知ニヨリ教師全部八名来会。入江氏ヲ主任トシテ、協議事項ヲ逐次審議シ、午後四時終了ス。一同繭質改良ニ努力センコトヲ期シテ夫々任地ニ就キタリ」(4月25日)。

5月下旬、東京で全国蚕糸業大会が開催されました。この大会に亀太郎が県代表で参加し、発言するなどしています。「全国蚕糸業大会ニ出席ス。十時半開会。出席者約四百名ニシテ、農林省ヨリ入江蚕糸局長、明石課長等臨席。補償糸売出及現下ノ停頓事情ニ就テ説明アリ。会議ハ滞貨生糸処分問題、蚕種、繭、生糸ノ生産制限、生糸販売統制、繭価補償法、繭乾燥保管奨励等ノ各事項ニ亘リテ討議セラレ、出席者ノ顔振レヨリスルモ兎角養蚕家本位ニ偏スル嫌アルヲ以テ、予、登壇。大ニ三業者併進ノ要アルヲ説キ、従来ノ他力主義ヲ排シテ当業者自発的ノ生産制限ハ糸価維持ノ根本策ナル所以ヲ強調シタリ。午後三時過諸案ヲ委員附託トナシ、予モ委員ノ一人トシテ慎重審議シタル上、六時半本会議ヲ再開。前記各件ノ実現ヲ決議シ、運動方法ハ農林、大蔵両大臣及政友、民政ノ各政党本部へ委員一同陳情ニ赴クコト、ナリテ、七時閉会ヲ告ゲタリ」(5月29日)

6月に入り、7年度の新繭が出回り始めました。生糸価格はどん底ですが(6月平均、横浜市場の生糸価格は100斤当たり478円)、春繭の価格は100匁当たり25、26銭で、割合高値で、高島製糸場は原料確保に苦労しています。「新繭引取ハ弗々始マリタルガ、割合高値ニシテ、貳拾五、六銭ニ出来シ、各方面特約組合多キ為メ、値極捗々シカラザル状況ナリ。購繭手配ナス」(6月6日)。

「繭買入手配中ニシテ、昨今両日ニ買付タルモノ、乾繭組合ニテ壱千貫(二六替)、土佐伊布里ニテ壱千五百貫、南郡ニテ貳千貫等ナリ」(6月9日)。

6月16日、昭和6年度の製糸業が終了しました。6年の深刻な恐慌、また、7年の3月以降の糸価大暴落にもかかわらず、高島製糸は6年度を何とか持ち

こたえました。先にも述べましたが、日記に「本日ヲ以テ古繭繰糸ヲ全部終了シ、夜、職工慰安ノ為メキリン館ノ活動ヲ観覧セシム。三月以来糸価崩落、斯界窮迫、名状スベカラザルモノアルニ不拘、昨年六月以来ノ一ヶ年ヲ通ジ、昭和六年度ノ製糸トシテハ損失ヲ見ザリシノミナラズ、乾燥機ノ改造、六条鍋ニ取替等必要ノ設備ヲ改善シテ、尚些少ナガラ利益ヲ挙げ得タルハ望外ノ幸ニシテ、天寵ヲ謝スルノ外ナシ。午後七時ヨリ桐田君等数名ノ製糸家ト蔦屋ニ会シテ、繭相場不当高ノ対策ヲ協議ス」(6月16日)とあります。

6月18日より、昭和7年度の製糸業の操業(製糸年度で、昭和7年6月1日～8年5月31日、この7年度の釜数は112釜、女工134名、内繰糸女工120名<sup>10)</sup>)が始まりました。「本日ヨリ新繭ノ繰糸ヲ始ム。工女満員、六条繰黄二十一中ニシテ、初日工程十一本半ナリ」(6月18日)。

しかし、糸価は6月が最悪で、新糸価格もなお、恐慌価格状態が続いていました。日記に「新糸春黄二十一中式拾俵ヲ五〇〇円替ニ売約セリ」(6月24日)とあります。

7月1日に八幡浜において愛媛県製糸同業組合の評議員会および代議員会が開かれています。そこで、製糸同業組合の製糸業組合への組織替えおよび長年組合長を務めてきた摂津静雄の辞任が承認されています。「午前八時ノ第六鶴島丸ニテ桐田君及ビ武田儀久君ト共ニ、八幡浜へ赴キ、十一時同地新川矢の伝ニ於ケル製糸同業組合ノ評議員会及ビ代議員会ニ出席ス。決算承認及製糸同業組合ヲ解散シテ、新法規ニ拠ル製糸業組合ニ引継ノ件、摂津組合長辞任承認ノ件等ヲ決シ、又県蚕糸課計画ノ條桑育奨励、他府県蚕種排斥ニ反対ノ決議ヲナシテ、午後四時閉会ス。五時八幡浜発ノ発動船八幡浜丸ニ乗リテ、八時宇和島ニ帰着セリ」(7月1日)。この時の総会で、「南予の製糸王」と言われた摂津静雄が組合長を辞めたのは、任期というよりも、昭和恐慌の打撃により、摂津の経営する摂津製糸株式会社そのものが行き詰まったからでした。摂津製糸は7年

10) 高島製糸場「事業概況書」(昭和7年度)より。高島文庫所蔵。

の春繭資金の調達難に陥り、6月18日にその5つの工場(西宇和郡双岩村の本工場、同郡神山町の神山工場、東宇和郡宇和町の宇和支店、北宇和郡旭町の旭支店、伊予郡下灘村の豊田工場)を一斉に休業し、そのうち宇和支店を摂津盛徳、豊田工場を越智武則に譲るなどしています。<sup>11)</sup> 恐慌の深刻さが伺われます。

そして、7月10日に大洲町において、愛媛県製糸業組合の臨時総会が開催され、この総会で、亀太郎が組合長に選ばれました。亀太郎は、宇和島のリーダーから、名実ともに、愛媛県のリーダーになったわけです。「午前八時出港ノ第六鶴島丸ニ乗船シ、桐田君及ビ製糸組合書記武田君ト同行、大洲ニ向フ。十時過八幡浜ニ上陸シ、三共自動車ニ乗継ギテ、正午大洲町ニ着シ、油屋ニ於ケル愛媛県製糸業組合ノ臨時総会ニ出席ス。杵田第一区支部長ヲ議長トシテ、午後一時ヨリ開会。摂津組合長辞職ノ後任選挙ハ投票ヲ省キテ、五名ノ詮衡委員ニ人選ヲ一任スルコト、ナリ。杵田、桐田、池下等ノ委員別室ニテ詮衡ノ結果、予ヲ組合長ニ推薦セラレ、満場一致ヲ以テ承認ス。則チ予、起チテ当选就任ノ挨拶ヲ述べ、二時半閉会ヲ告グ」(7月10日)。

7月に入り、金輸出再禁止・円安の効果が現れ、また、アメリカの景気は底をついたため、対米生糸輸出が回復・増加に転じ、7月末以降、糸価が急激に、高騰していきました。横浜市場の100斤当たり糸価は、どん底の6月の478円が、7月には518円に回復し、8月には759円へと高騰していています。日記にも「糸価連騰、本日黄二十一中千斤六〇〇円替ニ売ル」(7月30日)、「清算ニテ拾俵六二八ニ、現物先約ニテ貳拾俵六一〇ニ売ル」(8月1日)、「九月渡シ黄二十一中千斤七一〇替ニ売約シタリ」(8月8日)等々とあります。この日記中、千斤は10俵に当たり、生糸10俵を100斤当たりの600円とか710円とかの価格で売ったと言う意味です。

7月以降の生糸価格回復・高騰に伴い、養蚕農家・養蚕組合側も次第に強気になり、繭価も次第に上昇していきます。日記に「川ノ内、西仲組合ノ役員来

11) 『愛媛新報』昭和7年6月26日。

場、二九〇ニテ繭価協定成レリ」(7月5日)、「延野々、豊岡、吉野ノ各養蚕組合役員来場。春繭ノ価格協定ヲ行ヒ、頗ル折衝難ナリシガ、結局三〇替ヲ以テ成立ス」(7月13日)、「光満組合トノ春繭価格協定ヲ行ヒ、三〇替ニ決定ス」

(7月14日)、「長月組合ヨリ繭価協定ニ来タリ、二七・〇(白繭)ニテ決定見タリ」(7月15日)、「家藤組合ヨリ春繭値段協定ニ来リ、白二九・五替ニ決定ス。之ニテ特約組合全部協定済トナレリ」(7月18日)等々とあります。特約組合との繭価格は、100匁当たり29銭とか30銭となり、少し上昇しています。

8月下旬になり、初秋繭が出回り始めました。特約組合から次々と繭を受込んでいっています。生糸相場がこの時期に激しく高騰したため(8月24日、横浜市場の清算生糸、100斤当たり900円に奔騰、8月29日、神戸市場の生糸清算価格1,200円)、養蚕農家もますます強気で、価格交渉が困難となり、繭価もさらに上がります。日記に「光満組合ハ繭価協定折合ハズ。鬼北(吉野、明治)ノ特約組合ハ西山ヲ派遣シ、四九替ニ決定ヲ見タリ」(8月31日)、「延野々繭ノ受込ヲナス。光満ノ繭価協定五一〇ニテ成立ス。川之内、西仲ハ三間方面高値ノ為メ折衝困難ニシテ尚交渉中ナリ」(9月3日)等々とあり、100匁当たり繭価は50銭前後にまで高騰しています。

10月に入り、晩秋繭の出回り時期になりました。生糸価格騰貴を反映(10月866円、11月930円)、この時も養蚕農家はますます強気です。特約組合との取引価格が中々決まりませんでした。日記に「晩秋繭出廻り期近ヅキタルガ、早場相場破格ノ高値ニテ、特約組合物ノ引取困難ナリ」(10月7日)、「仁田浜特約組合ノ晩秋繭ハ附近養蚕地ノ出来値準ジ、六十二銭五厘ニテ値段協定ス。近年ノ高値ナリ」(10月10日)。「光満及ビ西仲川ノ内組合トノ繭価協定ヲ行ヒタレドモ、折合ヲ見ルニ至ラズ」(10月26日)。「午前長月及畑地組合ノ役員来場ス。……西仲、川ノ内ハ西山出張シ、五九・五替ヲ以テ繭価協定了レリ」(10月28日)、「光満組合ヨリ再ビ繭価協定ニ来リ、終ニ六〇〇替ヲ以テ成立ヲ見タリ」(10月30日)、「午前家藤組合ノ役員ト繭価協定ヲ試ミタレドモ成ラズ」(11月7日)「家藤晩秋繭ハ掛目四七・五替ノ正量取引ニ決シ、延野々ハ百目五九・五

替ヲ以テ協定成立セリ」(11月9日)等々とあり、繭価は60銭前後に上がっています。

このように、繭価は7年に回復・上昇していきましたが(6月に比べて、11月にはほぼ2倍)、それでも、高島製糸場はなお比較的安く繭を手に入れたようです。

亀太郎は、昭和7年を振り返り、年末、次のように回顧しています。「本業製糸ノ業績ハ、前半期糸価未曾有ノ安価三百円台ニ陥リテ、斯界多難ノ年ナリシモ、幸ニ無難ニ経過シ、六月新糸以降ハ原料繭ノ安仕入ニ加ヘテ、為替安ニ伴フ糸価ノ暴騰アリ。数万円ノ利益ヲ挙ゲテ予想外ノ好成績ヲ見タルハ天寵ト云フノ外ナシ」(12月31日)。

以上、昭和7年の高島製糸は、前半期の深刻な恐慌期を何とか持ちこたえ、後半期には原料面で特約組合との折衝でもめましたが、原料繭を安く調達でき、また、7月以降の円安による生糸価格高騰により、予想外の好成績を得、危機を乗り切ったようです。なお、円相場は昭和7年6月の100円=30.298ドルが、12月には20.699ドルに下落しています<sup>12)</sup>

### 第3章 昭和8・9年

高島製糸場は、昭和8年(1933)1月2日より操業を始めています(繰糸釜数112釜)。

亀太郎は、この年の早々、1月に高知県幡多郡入野方面へ新しく特約養蚕組合の設置を計画し、1月12日に幡多郡下田町養蚕組合と、13日には田之口村田野浦養蚕組合と特約契約を結び、特約取引をさらに拡大しています。

8年の生糸相場を見ますと、7年の後半に高騰した糸価は、12月に944円の頂点に達しましたが、8年に入り、1月中旬以降、糸価はまたまた暴落に転じました。すなわち、横浜市場の糸価は、8年1月に780円、2月に710円、3

12) 高橋亀吉『前掲書』1398頁。

月に660円へと暴落を続けています<sup>13)</sup>。日記にも「生糸相場一月中旬以来急劇ニ下落シ、昨今七百円ノ維持困難ノ市況ナリ」(2月5日)、「国際連盟形勢案ジニテ、諸株暴落シ、生糸モ安シ」(2月13日)、「米国モラトリアムノ為メ、生糸市場清算現物共休業シ、相場無見当とナレリ」(3月6日)等々とあり、糸価相場悪化・暴落の様子が分かります。

糸価暴落・恐慌対策のためには、コストの引き下げ、生産性の向上のため、技術革新を図ることが必要であり、愛媛県下の先進的製糸工場(喜多郡白滝村の白滝製糸、四日町の小泉製糸等)では、多条繰糸機の導入がなされています。高島製糸場にも、2月、多条繰糸機の販売員が売り込みに来ています。日記に「小岩井式及ビⓈCM式多条繰煮繭器、繰糸機ノ外交員相次デ来訪」(2月16日)とあります。5月1日にも売り込み勧誘ヲ受け、その結果、亀太郎もついに、小岩井式多条繰糸機52台を据えつけることを決心しました。日記に「試ニ多条繰機五十式台ヲ設置スルコト、シ、従来ノ石炭置場バラツクヲ除キテ、其跡へ四間二十六間ノ工場ノ建築ヲ土居多一郎ニ請負ハシメ、又小岩井式多条繰糸機ヲ市橋時太郎君ニ注文ス。夜、現業員ヲ会シテ此計画ヲ発表セリ」(5月2日)とあります。そして、5月3日に、合名会社小岩井製作所(代表小岩井宗作、長野県松本市)と、市橋商会(市橋時太郎、神戸市神戸区海岸通3丁目)を販売代理者として、小岩井式20条繰製糸機械52窓を購入する契約証書を取り交わしています。価格は8,320円でした<sup>14)</sup>。

5月以降、亀太郎は多条繰糸機購入に伴う新工場建設の準備に入ります。5月18日に新工場の建設場所を決め、21日に工場建設の願書(「工場取締規則ニ依ル建築物設置願」)を愛媛県知事に提出しています。その願書の文章が残っています。それによりますと、機械は、①従来の6条繰製糸機械112台のうち8台を廃止して104台とし、②小岩井式多条繰製糸機を52台導入する(1台の緒数は20)、③揚返機は40窓新設して140窓とする、④煮繭機は、千葉式煮繭機

13) 高橋亀吉『前掲書』1398頁。

14) 「小岩井式式拾条繰製糸機械契約証書」、高島文庫所蔵。

を1台新設して2台とする、⑤乾燥機は今村式乾燥機1台のままとする。職工は、男工14名、女工200名の予定とする。就業時間は、午前6時より午後5時までの11時間で、休憩時間は、午前7時30分より50分までの20分間と正午より午後0時40分までの40分間とする。建物として、繰糸場1棟(64坪)、揚返場1棟(15坪7合5勺)増設する、また、煮繭場から繰糸場への渡廊下と繰糸場から揚返場への渡廊下を増設する、<sup>15)</sup>というものです。

5月25日、昭和7年度の製糸業が終わりました。純益が6万5,000円ほどあり、7年度は思った以上に大変良好でした。日記に「本日積送生糸千斤ヲ八二五替ニ売極メタルモノヲ以テ、七年度製品全部売方終了ヲ告グ。昨年五月一日ヨリ本年四月三十日ニ至ル昭和七年ノ製糸年度ノ業績ハ、純益六萬五千元ヲ拳グルヲ得、天寵感謝ニ堪ヘザル所ナリ。尚、本日ノ沼津新繭相場初取引ハ、黄買馴五〇八、白同五二九、掛目四十一掛ニシテ、昨年春繭ノ二倍ニ当リ、繭値頃高ニヨル。本年製糸業多難ヲ想ハシム。戒心ト善処ヲ要スルコト切ナリ」(5月25日)とあります。7年度の収支が良好だったのは、7年の7月～12月の糸価が回復・高騰したこと、また、8年に入り1～3月は糸価が暴落したものの、4～5月に回復したためでした(3月の660円が、4月722円、5月797円へ)。

なお、高島製糸場が、農林省蚕糸局に出した「昭和七年度 全国器械製糸工場調」の数字を掲げておきましょう。工場の所在場所：宇和島市伊吹町、企業組織：個人、繰糸機の名称：普通繰糸機、釜数：112、1釜緒数：6、一日平均使用釜数112、繰糸方法：分業・半沈、揚返窓数：100、作業監督員：男2、職工：男7、女134、その他男3、従業員合計：男12、女134、消費繭量：春蚕繭白2,200貫、黄9,550貫、夏秋蚕繭白6,100貫、繭合計1万7,850貫、生糸製造量：春蚕糸白838貫、黄3,324貫、夏秋蚕糸白2,179貫、生糸合計6,341貫、輸出生糸の販売数量及び価額：6,274貫、33万280円、地遣生糸の販売数量及び価額：67貫、2,660円、副蚕糸生産数量3,211貫、副産物販売価額5,928円、

15) 高島製糸場「工場取締規則ニ依ル建築物設置願」(昭和8年5月)、高島文庫所蔵。

1 釜当たり生糸生産数量：1ヵ年6.2 梱，1日177 匁，1作業日数320日，でした<sup>16)</sup>

5月下旬，8年度の春繭の季節となりました。5月27日に，亀太郎は購繭員を集めて，打ち合わせし，各特約組合へ派遣しています。

6月に入り，各特約組合からの繭の受け込み，ならびに価格協定がなされています。

8年の生糸価格は，4月以降再び，回復・高騰していき，6月には，962円にまで高騰しています。それに伴い，養蚕家が大変強気となり，春繭の価格取り決めは難航し，100匁当たり60銭を越え，高畠製糸には不本意な価格で取り決められています。日記に「畑地六三替ニ決定。伊方ハ終ニ不調解約ニ決セリ」

(6月7日)，「蔣淵六二，清満六二五，長月六〇ニ値極ス」(6月8日)。「丸穂ノ繭七〇五ニ売行キ，繭価愈々爆進ス。蔣淵，清満，下灘ノ特約繭ヲ受込ミタリ」(6月11日)。「掛網代特約組合繭六五ニ決定。吉野，明治方面ハ未定ノ儘受込ヲナス」(6月13日)，「出張受取ノ外，直接持込ノ光満，家藤繭モ入荷ス。生繭ノ受取ハ大体本日ヲ以テ終了シタルガ，山間部ハ高値取引アリテ値極不折合ナリ。土佐下田ノ特約口六三〇ニ決定ス。同地モ協定困難ナルガ如シ」(6月15日)等々とあります。8年度の高畠製糸の前途多難ぶりが予想されます。

6月13日より，昭和8年度の製糸業が始まりました。これは，従来の普通工場の方です。「本日ヨリ工場普通繰糸百釜ノ作業ヲ開始ス。工女満員ナリ」(6月13日)。日記中普通繰糸100釜とありますが，正確には104釜です。

多条繰糸機使用の新工場の操業は少し遅れました。6月18日に小岩井式多条繰糸機が到着し，19日から据え付けが始まり，7月2日に据え付けが終了しました。そして，この日までに多条繰糸の教婦が来場し，また，新工場のために募集した繰糸工女も次々に来場し，準備が整いました。「多条繰機ノ設備成リ，教婦モ太田ミサ子外二名，信州普及社ヨリ昨夜到着ニ就キ，明日ヨリ繰糸ヲ開

---

16) 農林省蚕糸局「昭和七年度 全国器械製糸工場調」。

始スルコト、シ、現業員佐々木、二宮、兵頭、山崎ノ外、新ニ採用ノ高田、清家ト教婦三人ヲ会シテ事務打合ヲナス。新ニ募集ノ多条機使用ノ工女モ弗々来場シテ、満員ノ見込立ち、新工場ノ準備略整ヘリ」(7月2日)。

そして、7月3日に待望の多条繰糸機使用の新工場の操業が始まりました。操業は順調でした。日記に「小岩井式多条繰機(二十口)五十二台ノ繰業ヲ開始ス。工女満員、朝一同ヲ集メテ、予ヨリ開場ノ辞ヲ述べ、教婦ヨリ技術及ビ機械使用上ノ説明アリ。作業ノ大綱ヲ教授シ、午後ヨリ各員ノ実地繰糸ヲ始ム。大体ニ於テ予想程ノ困難ナク順調、機械ノ運轉モ至極円滑ナリ」(7月3日)とあります。これにより、高島製糸場は、2つの工場を持つことになり、亀太郎は従来の普通繰糸の工場を第一工場、新設の多条繰糸使用の工場を第二工場と名づけています。「従来ノ普通繰糸工場ヲ第一工場、新設ノ多条繰工場ヲ第二工場ト称スルコト、ス。多条繰機ノ作業本日モ故障ナシ」(7月4日)。

多条繰糸機使用の新工場は、工女の疲労も少なく、能率も良好で、順調でした。「多条繰糸機繰糸ハ工女ノ疲労等モ甚シカラズ、引続順調ニ作業シ居レリ」(7月9日)、「多条繰ハ座繰ヨリ能率進ムニ到リタルガ、本日其製品十俵ヲ始メテ出荷ス」(7月22日)。

以上、多条繰糸機使用の新工場の立ち上げにより、高島製糸場の8年度の生糸生産は、大変順調に進んだのですが、生糸価格の方が大変悪かった。8年7月以降、生糸価格が又々大暴落しました。100斤当たり糸価は、6月に962円でしたが、7月に893円、9月に834円に下がり、そして、11月には590円へと大暴落しています<sup>17)</sup> 日記にも、「糸価次第ニ安シ」(10月11日)。「清算生糸大台破レノ六九五ト続落ス」(10月12日)、「糸価安六七〇トナル」(10月20日)、「清算生糸五九四迄下押ス」(11月8日)、「生糸益々下落シテ、清算五二〇迄アリ」(11月24日)等々とあります。

このように、昭和8年の後半の糸価は、大変悲惨でした。糸価暴落の原因は、

17) 高橋亀吉『前掲書』1398、1654頁。

①8年3月にアメリカに金融恐慌が勃発し、世界恐慌がブリ返したこと、②レーヨンとの競争、③アメリカが3月金輸出再禁止を行い、ドル高（円安）からドル安（円高）へ転換したこと（3月100円=21.761ドルが、7月27.986ドル、12月には最高30.5ドルへと円高に）、そして、④それらに伴い、対米生糸輸出が減少した、等のためでした。

それに対し、繭価格はあまり下がらず、否、高かった。春繭も高かったが、初秋蚕も高く、前途多難です。8月中旬、初秋蚕の出回り時期となりましたが、繭高を訴えています。日記に、「初秋蚕繭出廻近ヅキ、特約外ヲ多少買入ノ手配中ナルガ相場高シ」（8月15日）、「柏ノ繭ヲモ買付ケタルガ相場続テ安カラザルヲ以テ、跡ハ特約以外ノ新規買付ヲ見合ハスコト、セリ」（8月19日）等とあります。特約組合の初秋蚕の価格は100匁あたり54～55銭位でした。

10月に晩秋蚕の受け込みが始まりました。やはり、糸価暴落にもかかわらず、養蚕家が繭価引き下げに応じず、晩秋蚕の繭価を巡って、製糸家と養蚕家の間で鋭い対立が起きています。日記に「九時ヨリ中ノ町製糸組合へ行キテ同業者ト会シ、打合ノ上、宇和支庁ニ於ケル晩秋繭検定取引掛目協定会ニ臨ム。養蚕家ハ生産費百五十円ヲ、製糸家ハ二百円ヲ主張シテ互ニ譲ラズ。午後四時ニ至リ遂ニ不調ノ儘散会ス」（10月7日）、「午前九時市会ニ出席シ、午後二時終ル。引続キ製糸組合ニ同業者ト会シテ、晩秋繭値極対策ヲ協議シタリ」（10月23日）、「午後四時鳶屋ニ於テ来宇中ノ片倉製糸中村出張所主任美馬氏及ビ俵津、桐田ノ諸製糸ト会合、幡多郡特約組合繭値極ニ就テ協調スルコトヲ約セリ」（10月27日）、「午後三時製糸組合ニ会合。検定取引掛目協定会対策ヲ協議ス」（10月28日）、「一昨日来協定中ナル幡多郡特約繭価格標準決定ニ就テ、片倉ノ美馬、熊澤、桐田ノ場主及宮川、俵津ノ菊池、高岡等ノ諸氏ト更ニ会商、種々論究ノ結果、午後二時ニ至リテ中心値ヲ三九・五トシテ養蚕組合側ニ臨ムコトニ決定ヲ見タリ」（10月29日）、「本日宇和市庁ニテ開カル、掛目協定会ニハ、一昨日製糸家会合ノ際ノ申合ニヨリ、製糸業者側ハ一名モ出席セザリシガ、之ガ為メ来宇中ナル井上蚕糸課長ヨリ内談アリ。二時過鳶屋ニ於テ、同氏及ビ長井市庁

長ト会見、先日来ノ事情ヲ詳細説明ス。其結果本日ノ協定会ハ流会トシ、幹部少人数ニテ懇談会ヲ開クコト、ナリ、右両氏ノ外、製糸側ノ予及桐田君、連盟会長赤松則義氏、養蚕家側中平嘉太郎君ノ数名ニテ、六時ヨリ春の家ニ会合ス。課長ノ仲裁説出デシモ、具体化セズ。十一時頃帰宅シタリ」(10月30日)、「午後製糸業組合ニ会シ、同業者ト掛目協定会対策ヲ協議シタル結果、五時、予ト桐田君トニテ、宇和市庁ニ長井市庁長ヲ訪ヒ、製糸家ノ意向ヲ告グ」(11月2日)、「午前十時ヨリ宇和市庁ニ於ケル晩秋繭掛目協定会ニ出席ス。論難ヲ重ネタレドモ纏ラズ。養蚕家ハ三十二掛四、製糸家ハ二十八掛ヲ主張シタル結果、別ニ委員ヲ設ケテ交渉スルコト、ナリ。予等委員トナリテ協商シタレドモ、合致点ヲ見出スニ至ラズ。延会ト決シテ午後五時散会ス」(11月4日)、「午前九時宇和市庁ニ於ケル晩秋繭掛目協定会ノ委員会ニ出席シ、養蚕家側三十掛迄譲歩シタレドモ、当方承諾セズ。結局之ヲ最終ノ会見トシテ、不調ノ儘打切り、實際ノ取引ハ個々ノ相対的交渉ニ待ツコト、シテ一段落ヲ告グ」(11月12日)とあります。

以上のように、結局、繭価は養蚕特約組合との個々の取引となり、高島製糸場は、100 匁当たり 38~40 銭でとりきめています(家藤養蚕組合とは11月18日に38.5 銭で、光満組合とは23日に40 銭、川之内・西仲組合とは25日に39 銭にて協定締結)。

8 年の糸価暴落に対し、生産制限を図るため、愛媛県製糸業組合(組合長は高島亀太郎)は11月28日、大洲で製糸業者大会を開催し、12月10日より9年2月末まで操業休止を決めています。「午前八時桐田、赤松、三好ノ諸氏及製糸組合主事武田君ト共ニ自動車ニテ出発、大洲町へ赴キ、十一時ヨリ油屋ニ於テ愛媛県製糸業者大会ヲ開会ス。来会者喜多郡ヲ中心トシテ、東予、南予共五十余名ニ達シ、討議ノ結果、十二月十日ヨリ明年二月末迄操業ヲ休止シテ、糸価維持対策ヲ実行スルコトヲ決議ス。但シ生糸先約其他ノ関係上休業困難ノ向ハ除外例ヲ設クルコト、シテ、南予方面等操業継続ノ当業者ヲ拘束セザルコト、ナシタレバ、吾工場等ハ従来通りナリ」(11月28日)。

また、製糸業組合は、休業中の製糸職工に休業手当を支出しないことの一了解を愛媛県に求めています。「午前七時ノ三共自動車ニ乗りテ松山へ行き、十二時城戸屋ニ入ル。午後大谷ニテ来松中ナル栢田與三郎、摂津盛徳両氏ト会ヒ、共ニ県へ行キテ、連警察部長ニ面会シ、汐谷工場課長モ列席ノ上、製糸業組合ノ希望タル休業中ノ職工手当不支出ノ諒解ヲ請ヒ、或程度ノ承諾ヲ得タリ」(11月30日)。又しても、製糸業の危機を製糸職工にしわ寄せをしたわけです。

12月18日に、東京で全国製糸業組合聯合会の総会がありました。愛媛から亀太郎が出席し、発言しています。日記に「朝七時十一分東京着。呉服橋龍名館ニ投宿ス。十時有楽町蚕糸会館へ行き、全国製糸業組合聯合会総会ニ出席ス。十一時四階会議室ニ於テ開会。先ヅ絹業使節トシテ最近欧米ヨリ帰朝ノ今井五介氏ノ視察談アリ。昼食後午後一時半ヨリ再開会。予算案其他ノ諸案ヲ附議シ、予モ二、三提言スル所アリ。生糸宣伝費ノ件ハ委員附託トナリ、議長今井氏ヨリ指名、予モ委員ニ選マレ、遠藤三郎兵衛、小口善重、大久保佐一等業界一流ノ人々ト共ニ別室ニ於テ委員会ヲ開催ス。四時ヨリ会議室ニ於テ加藤知正氏ノ講演アリ。五時議事ニ入り、会費賦課割其他ヲ決シテ、五時二十分散会。夫レヨリ会長ノ案内ニヨリ、一同自動車ヲ連ネテ目黒雅叙園ニ到リ宴会ニ出席ス。広大ナル庭園アリテ客室数十ニ及ブ。予等ハ竹林ノ間ニテ支那料理ノ饗ヲ受ケ、八時過帰レリ。後銀座ヲ散歩シ、浅草観音等ノ市ノ雑沓ヲ観テ十時半帰宿ス」

(12月18日)、「朝、蚕糸会館へ行ク。九時半委員会。十時半総会ヲ開キ、会議ハ午後ニ亘リテ原案ノ外重要ナル諸建議案ヲ附議シタルガ、帝蚕積立金増加案ハ、予等反対説ヲ述ベテ宿題トナリ、又糸価維持休業案ハ是亦極力反対ノ結果、委員附託トナリタルガ、之ハ別ノ委員ニテ審議ノ末、六時四十分ヨリ本会議トナリ、変則的ニ出荷三割制限案トシテ報告セラル。予等大ニ反対意見ヲ陳ベタレドモ、採決ノ結果ハ愛媛、和歌山等六名ノ反対ニ過ギズ。大多数ヲ以テ委員案通過シ、二十二日ノ中央会々議ニ附スルコト、ナレリ。八時閉会ヲ告グ。帰宿後銀座通へ出デ、買物等ヲナシ、十時半宿ニ帰レリ」(12月19日)とあり、亀太郎が全国製糸組合の執行部案に反対している様子が伺われます。

亀太郎は、昭和8年を振り返って、年末、次のように回顧しています。「営業ハ、新糸以来蚕糸界稀有ノ不況ニ再会シ、糸価下落ノ為メ、春夏秋繭三季ノ仕入繭孰レモ損失ニ帰シテ、前年度ノ利益モ之ヲ補フニ足ラズ、優ニ六、七万円ノ欠損ヲ見ルニ至レルハ遺憾ノ極ミナリ。只僅カニ致命傷ヲ免カル、ヲ得タルモ、今ニ於テ善ク時勢ノ移ルヲ達観シ、当業者トシテ大ナル覚悟ヲ要スルヲ感ズルコト切ナリ」(昭和8年回顧)。

また、別の資料からも、昭和8年が高島製糸場にとって、悲惨な年であることがわかります。昭和8年12月31日現在の高島製糸場が、商工省に提出した「工場調査票」によりますと、高島製糸場の設備は、普通繰糸機104釜、多条繰糸機52台、揚返窓数140、蒸気エンジン1、電動機3であり、職工数は、男工14名、女工166名、合計180名、事務職員2名、技術員2名であり、作業日数は304日、1日の労働時間は10時間、賃金は、男工1日70銭、女工48銭で、賃金支払い総額2万8,270円であり、1年間の繭使用量は4万8,200貫、26万7,500円、生糸の生産高は4万200斤(6,432貫)、28万3,500円、生糸在庫量1,000斤(160貫)、6,200円、生皮苧497貫、4,270円、生皮苧在庫量15貫、150円、等々となっていました<sup>18)</sup>すなわち、この年の生糸販売金額は、繭代と賃金を賄えず、収支は赤字になっていることが分かります。

以上、5、6、7年は何とか恐慌を乗り切ってきた高島製糸場ですが、8年は巨額の損失が出て、到底乗り切れず、特に悲惨な年であったようです。

昭和9年(1934)1月に入っても、生糸価格の暴落が続き、さらに深刻化していきました。横浜市場の生糸価格(100斤当たり)は、9年の1月590円、3月575円、5月523円、7月481円、9月470円、11月564円と、9月まで劇落を続けています。この糸価水準は、恐慌直下の5・6年の糸価水準よりも悪く、9年が最も最悪・最低の年といえます。

ところで、昭和9年の日記は、1月1日から2月24日迄しか書かれておらず、

18) 商工省調査「工場調査票」(昭和8年1月～12月末までの1年間、昭和8年12月末現在。9年2月15日提出)。高島文庫所蔵。

残念ながら、この時期の高畠製糸場の動向の詳細は不明です。そこで、別の資料により、9年の状況を探ってみましょう。

高畠製糸場が、商工省に提出した、昭和9年12月31日現在の「工場調査票」によりますと、高畠製糸場の設備は、繰糸機150、再繰機130、煮繭機2、蒸気機関2、電動機4であり、職工数は、男工16名、女工188名、合計204名、事務職員1名、技術員2名であり、作業日数は324日、1日の労働時間は11時間、賃金は、男工1日95銭、女工52銭で、賃金支払い総額3万6,480円であり、1年間の繭使用量は7万4,200貫、24万4,860円、生糸の生産高は5万9,700斤(9,552貫)、32万8,350円、在庫量2,000斤(320貫)、1万2,000円、生皮苧768貫、8,730円、生皮苧在庫量24貫、255円、等々となっていました<sup>19)</sup>

この「工場調査票」から、8年末と9年末を比較してみますと、9年末の繰糸機150は第一工場と第二工場の合計であり、8年末に比べ6釜程の減少ですが、設備にかんしては、殆ど変化はありません。しかし、9年には女工数や1日の労働時間を増やし(10時間を11時間に)、また1年間の作業日数も増やし、繭の使用量を1.5倍程増やし、その結果、生糸生産高を1.5倍に増大させています。

すなわち、高畠製糸場は糸価の暴落に対し(高畠製糸の生糸の単価は、8年が100斤当たり705円でしたが、9年には550円に暴落)、生産量の拡大で、切り抜けているようです。技術水準は変わりませんから、専ら労働時間延長と労働強化を図ったといえます。なお、賃金は少し上げていますが(女工賃金は48銭から52銭へ)、労働強化には見合っていないようです。そして、9年の収支を見ますと、生糸の売り上げ額で、原料繭代と賃金支払い額を賄っており、9年は黒字でした。その最大の要因は繭代金にあります。繭代金は増大していますが、購入単価が劇落し(8年1貫当たり5.55円が、9年には3.30円に暴落)、高畠製糸場は安く原料繭を確保できたのでした。要するに、高畠製糸は女工と

19) 商工省調査「工場調査票」(昭和9年1月～12月末までの1年間、昭和9年12月末現在。10年4月30日提出)。高畠文庫所蔵。

養蚕農家を犠牲にして，9年恐慌を何とか乗り切ったと言えるでしょう。